



狂い咲く大和 -ネオ・ヤマト短編集-

【和風の国家ネオ・ヤマト♡】

【帝や巫女がとってもえっち♡】

【オルガエンジン】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ L

桜の誓い

『散華』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ
「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

桜の誓い:散華

1. 落日の適性試験

新京都の地下都市、ブロックC-7の住居は、コンクリートの底冷えと、擦り切れた畳の乾いた匂いに満ちていた。

2025年6月17日、朝5時。

無機質な起床のチャイムが鳴り、ミカは薄い布団から身を起こす。

彼女は震える手で、学校指定の制服に袖を通した。

足首までを完全に隠す分厚いスカート。

首元まで隙間なくボタンを留める、硬いブラウス。

肌を晒すことは最大の「穢れ」であり、忌むべき恥とされている。

固い布地が首筋を擦るたび、微かな息苦しさを覚え、ミカは無意識に第一ボタンを少しだけ緩めようとした。

「ミカ、襟元が緩んでいるわよ。だらしない」

台所から、母の鋭い小言が飛んだ。

「そんなだらしない格好で外を出たら、すぐドローンに『風紀の乱れ』で減点記録されるわ。ご近所さんに恥を晒す気？」

「ごめんなさい、お母さん……」

ミカは慌てて一番上の硬いボタンを留め直し、息を吞んだ。

物理的な喉の詰まりは我慢しなければならない。

規律と調和を守ることこそが、ネオ・ヤマトの「清らかさ」なのだ。

着替えを終えると、家族四人で台所の隅に設えられた小さな神棚に向かう。

飾られているのは、十二単を纏った「現人巫女（神皇陛下）」の美しい御真影だ。

冷たい畳に額を擦り付け、父が低い声で祈りを先導する。

「帝都の奥深くで、今この瞬間も御身を削って国を護られている陛下に、心からの感謝を」

ミカも目を閉じ、無垢な祈りを捧げた。

陛下が清らかな自己犠牲を払っているのだから、自分たちも身なりを正し、命を捧げて国に尽くさねばならない。

食卓には、味気ない合成米の粥と塩気の薄い野菜スープが並んだ。

「また配給が減った。下層の連中は資源回収で死にまくってる。俺たちもいつか……」

整備工場での夜勤明けの父が、ぼつりと疲れた愚言を零す。

その瞬間、母が血相を変えた。

「あなた！ 減多なことを言わないで！」

母は慌てて薄い壁を睨み、窓の外を飛ぶ監視ドローンの羽音に耳を澄ませる。

「だらしのない弱音を隣やドローンに聞かれて、不敬で連行されたらどうするんですか.....っ」

怒りよりも、明らかな恐怖に満ちた声だった。

ミカ的首筋に埋め込まれた家紋チップが、監視の目を誇示するようにピッと微かな熱を持つ。

隣人も、家族でさえも、「名誉」と「不敬」の基準で監視し合う。息の詰まるような日常がそこにあった。

そんな重苦しい空気の中で、壁のポスターだけが薄暗い蛍光灯の下で輝いていた。

描かれているのは、国を護る機動兵器『カミカゼ』の白と赤の威容。

その巨大な鋼の装甲の前で、桜の紋章を胸に、儀礼用の日本刀を凜と掲げるパイロット——通称「巫女」の美しくも気高い姿だ。

ミカの胸が高鳴る。

今日、彼女はその「巫女」になるための、オルガパイロット適性試験を受ける。

(パイロットになれば、補償が出る。広い住居と、ユキの薬が買える.....)

咳き込む八歳の妹の背中を撫でながら、ミカはポスターの巫女に静かに誓った。



訓練所への通路は、地下都市の冷たい鉄骨と、色鮮やかな桜の紋章の壁画で彩られている。

監視ドローン「ツバメ」が旋回し、人々の家紋チップを記録していく。

通路の端では、廃墟都市から来た工員たちが資源回収のトラックに乗り込んでいた。

煤けた顔。

簡易チップの赤い光。

ミカは目を逸らし、自分に言い聞かせるように武士道を唱える。

「名誉は奉仕にあり。穢れを清め、調和を守る」



休み時間、男子のケンが話しかけてきた。

「巫女って、すげえよな。カミカゼでエコーズをぶっ倒すんだぜ」

ケンの目は無邪気に輝いている。

「うん、すごいよね……」

ミカは少しだけ頬を赤らめて微笑んだ。

ケンに「巫女になった自分」を見てほしい。

そんな年頃の淡い自意識が、彼女の背中を押していた。

ケンは整備士を志望していた。

生産工員の仕事を「下層の汚れ仕事」と軽視している。

「親父、合成食のライン監督やってたけど、クソくらえだよ」

ミカは相槌を打つが、内心はざわついていた。

少女たちの間で囁かれる噂が耳から離れない。

『連合のユニットは、全裸で槽に放り込まれるらしいよ……』

『でも、うちの試験だって……身体を捧げるんだって……』

肌を見せることすらタブーとされるこの国で、そんなことがあり得るのか。

不安を打ち消すように、ミカは再び、心の内でポスターの巫女に祈った。

◇

訓練所は、白石の壁が眩しい荘厳な聖域だった。

数百人の少女が列をなし、緊張と希望が空気を震わせている。

ケンが校庭のフェンス越しに見送ってくれた。

「ミカ、巫女になれよ！ ユキちゃん喜ぶぜ！」

「うん、頑張る……！」

期待に応えたい。ミカは力強く頷き、重い扉の向こうへと足を踏み入れた。

試験は、日常の「清らかさ」を根底から破壊する過酷なものだった。

広大な白石のホールに、密閉型シミュレーターが整然と並んでいる。

ミカは個室の筐体に導かれた。

「下着を脱いで、シートに座れ」

技師の声は無機質だった。

ミカの顔が一気に熱くなり、全身の血の気が引く。

「こんな……こんなこと聞いてない……っ」

呆然と立ち尽くすミカに、技師は手元の端末から目を離さず、ひどく事務的な声で急かした。

「早くしろ。後ろの志願者がつかえている」

肌を見せることへの強烈な羞恥心が、ミカの身体を竦ませる。

だが、拒否することは許されない。

彼女は震える手で下着を脱ぎ捨て、露わになった下半身のまま、冷たいコックピットのシートに腰を下ろした。

ガシャリ。

座った瞬間、シートから伸びた機械的な拘束具が音を立てて手足を固定し、彼女の自由を完全に奪った。

「ひっ……！」

逃げ場を失った彼女を冷徹に見下ろしながら、傍らに立つ技師がコンソールを操作する。

シートの中央から低い駆動音が響き、桜の模様が刻まれたテスト用のオルガデバイスが、無機質にせり上がってきた。

滑らかで冷たい金属の先端が下腹部に押し当てられ、躊躇いもなく、無理やり未成熟な粘膜を貫いた。

「あ、がっ……！」

初めて異物を挿れ込まれる強引な圧迫感。

未だ誰にも触れられたことのない柔肉を、冷徹な機械の推力が一切の慈悲もなく食い破る。

肉が裂ける残酷な痛みに息が詰まり、突き入る金属の隙間から、鮮やかな赤い血がツーツと白い太腿を伝って流れ落ちた。

だが、システムがもたらす地獄はそれだけではない。

内部でデバイスが低く唸りを上げ、微細なナノ振動を始めた瞬間、ミカの身体がビクンと大きく跳ねた。

「ん、ああっ……！ な、にこれ……っ」

処女を散らされた激痛の奥から、デバイスのナノ電極が脊髄神経へと直接、未知の『快樂パルス（電気信号）』を叩き込んでくる。

（ユキのために……耐えなきゃ……）

必死に唇を噛むが、身体を引き裂かれた激痛と、機械によって脳髄に直接流し込まれる強制的な快感信号が激しく混線し、ミカの脳は完全にパニックに陥った。

絶頂に至ることもできず、ただ苦痛と神経のスパークに翻弄され、甘く掠れた吐息と涙が零れ落ちてしまう。

家紋チップが心拍の急上昇を監視し、ピッ、ピッと無機質な警告音を立てる。

『出力ピーク、未到達。神経変換率、基準値未満』

技師の冷たい視線が、コンソールのエラー数値と、処女の血で汚されてただ痙攣するだけの無防備な下半身へと重くのしかかる。

「こんなの……っ、はぁっ、だめ……見ないで……っ」

痛みを快楽へと変換する「適性（才能）」を持たない彼女の肉体は、容赦のない機械の神経蹂躪と極限の羞恥に耐えきれず、無惨に碎かれた。

決定的に集中力と生体反応が乱れ、ミカの試験は終わった。

◇

夕刻。

掲示板に結果が貼り出される。

ミカの名前はない。

適性なし。

代わりに、同級生のハルの名が誇らしげに輝いていた。

歓声と泣き声が入り交じる中、ミカは凍りつく。

掲示板の脇に立っていたケンが、気まずそうに目を逸らした。

泣き出しそうなミカを前にして、どう声をかけていいか分からず、少年特有の不器用な照れ隠しから、つい心にもない言葉を吐き捨ててしまう。

「やっぱ無理だったか。巫女は別格だな……」

慰め方を知らない少年の、幼い逃避だった。

だが、その言葉は、誰よりもケンに認められたかったミカの胸を致命的に深く刺した。

「ケン……そんな目で見ないで……」

彼にだけは、そんな風に突き放されたくなかった。

その絶望で、言いたかった言葉は喉の奥に張り付いて出てこない。

重い足取りで家へと向かう帰路。

「不適合者」に向けられる世間の目は、ひどく冷たく、重かった。

絶望に沈む彼女の前に、一人の監視員の男が音もなく近づき、行く手を阻んだ。男は冷徹な目のまま、一枚の用紙を差し出す。

「オルガユニットなら、志願の道がある。これなら特例の補償で、家族を救えるぞ」

ミカは息を呑み、目を伏せた。

ユニット。その恐ろしい噂は、誰もが知っている。帰還する者は少なく、待っているのは死か自我の崩壊だということを。

「それでも……家族のためなら……」

震える手で志願書を受け取り、ミカは逃げるように帰宅の途についた。

2. 清めの儀

重い鉄扉を開けて家に入ると、淀んだ空気と防腐剤の匂いが鼻を突いた。

狭い台所では、母が薄暗い裸電球の下で、配給の合成和食を細々と皿に分けていた。

部屋の隅では、毛布にくるまったユキが、肺の奥から絞り出すような湿った咳を繰り返している。

「ミカ、おかえり。……試験、どうだった？」

母が振り返る。

その顔には、隠しきれない期待と、それにすがりつくような切実な不安が張り付いていた。

ポケットの中の『志願書』が、鉛のように重く感じる。

「……失敗した。ごめん……」

ミカは目を伏せ、逃げるように部屋の隅で膝を抱えた。

母の肩が、小さく震えたのがわかった。

責める言葉はない。

それが余計にミカの心を締め付けた。

やがて、整備工場から父が帰ってきた。

油で黒く汚れ、ひび割れた手で黙って冷めた粥をすする。

その目はひどく落ち窪み、生気を失っていた。

「また配給が減った。薬ももう、来月は買えん……」

ポツリとこぼれた父の独白は、誰に向けたものでもない、限界を迎えた人間の吐息だった。

「俺たちもいつか、下層の連中みたいに……」

「お父さん、やめて……っ」

母が顔を覆う。

限界ギリギリで保たれていた家族の糸が、今にもプツリと切れそうだった。

「ゲホッ、ゴホッ……！ はあ、はあ……」

激しい咳き込みと共に、ユキが苦しげに身をよじった。

ミカは慌てて駆け寄り、その小さな背中をさする。

ユキの手は氷のように冷たく、額だけが異常な熱を持っていた。

薄く目を開けたユキが、震える指でミカの袖を掴む。

「お姉ちゃん……巫女に、なるよね……？ そしたら、みんな……」

熱に浮かされた無垢な瞳。

それは、ミカへの絶対的な信頼と、生きるための最後の希望だった。

ミカはユキの熱い額に自分の額を押し当て、堰き止めていた涙をこぼさないように、必死に微笑みを作った。

「ユキ、元気になってね……。大丈夫、お姉ちゃん、頑張るから」

母がさすがのように顔を上げたが、ミカはあえて視線を逸らした。

家族の期待にも応えられず、ケンには無様に突き放された。

自分にはもう、「別格」になる才能も、彼に振り向いてもらう未来も残されていないのだ。

◇

夜。

家族が寝静まった暗闇の中で、ミカはポケットから志願書を取り出した。

窓の外から差し込むドローンの赤いサーチライトが、紙面に印字された冷酷な文字を照らし出す。

(ユニットなんて……死ぬかもしれない。狂っちゃうかもしれない……。でも、ユキが、お父さんとお母さんが……)

頭をよぎるのは、拘束衣を着せられ、廃人となって運ばれていく志願者たちの恐ろしい噂。

恐怖で指が震え、奥歯がカチカチと鳴る。

それでも、背後から聞こえるユキの弱々しい寝息が、ミカにペンを握らせた。

恐怖、絶望、そして家族へのどうしようもない愛。

ポロポロとこぼれ落ちた涙が、志願書の紙を黒く濡らしていく。

◇

翌朝。

ミカは訓練所の裏門に立つ監視員に、震える手で志願書を手渡した。

「これで……家族を救えますよね？」

男は志願書を受け取り、感情の読めない無機質な瞳で頷いた。

「名誉ある選択だ」

ミカは一人、後戻りのできない地下深層、「聖域」と呼ばれる地獄へと向かって歩き出した。



清めの儀の部屋は、燭光が揺れ、桜の紋章が刻まれた黒鉄の祭壇がそびえ立っていた。

漂う線香の煙と、機械油の重苦しい臭い。

神職の女性が、白と赤の装束で鈴を振り、経文のような詠唱を口ずさむ。

ミカは冷たい水で全身の「穢れ」を洗い流され、薄い白装束一枚に着替えさせられた。

そして、部屋の中央に鎮座する冷たい金属の拘束台へと寝かされる。

つい数時間前まで制服の第一ボタンの緩みすら許されなかった潔癖な少女の身体には、今や一枚の薄い布地が、恐怖の冷や汗で無惨に張り付いている。

「穢れを清め、調和に奉仕せよ」

神職が冷酷に告げると、祭壇の奥から重厚な駆動音が響いた。

現れたのは、桜の刻印が不気味に輝く、二本の極太な神経接続用チューブだ。

黒光りする金属の表面を、高濃度の伝導液が粘り気を帯びて滴っている。

覚悟は決めていたはずだった。

死も、自我の崩壊すらも受け入れたつもりだった。

だが、少女の想像を絶するおぞましい機械の威容を前に、ミカは目を見開き、声にならない息を呑んだ。

「ひっ……！」

黒光りする凶悪な装置が、無防備な脚の間へと迫る。

本能的な恐怖で身体が激しく硬直するが、無慈悲な拘束具が彼女の自由を完全に奪っていた。

「足を、開きなさい」

監視員の冷徹な声が響く。

「耐えるんだ……これは名誉……私は、家族のために……っ」

恐怖で震える唇を噛み締め、昨晚の決意にすがりつくように、ミカは固く瞳を閉じた。

だが、躊躇いのない力で冷たい先端が秘所に押し当てられた瞬間、悲痛な叫びが漏れ出す。

「あっ……！ あ、がっ……ううっ……！」

重厚な金属が、適性試験で傷ついたばかりの柔らかな粘膜を強引に押し広げて貫いていく。

同時に、もう一本の冷徹な鋼が背後の蕾を容赦なく抉り開き、直腸の奥深くまで侵入して骨盤を物理的にロックした。

「はぁ……はぁ……っ！ いやっ……！」

肉を裂き、内臓の配置を内側から強制的に作り変えられるような圧倒的な圧迫感。

最奥を二方向から直接突き上げられるおぞましい感触に、ミカの喉から乾いた吐息が漏れた。

「神経リンク、強制接続（ダイブ）」

次の瞬間、全身を貫くような重圧が襲った。

骨盤をロックしたチューブが骨の髄まで響くような振動を開始し、焼けるような薬液が一気に血管へと射出される。

「あ、ああああああああああっ！」

それは、脳髄を直接弄られるような暴力的な電気信号だった。

激痛は一瞬にして、神経が錯覚する狂ったような快感へと変質していく。

「これより、初期化（テスト稼働）を行う」

監視員が無機質にスイッチを入れると、挿入された二本の鋼が、容赦のない機械的なピストン運動を開始した。

「や、やだぁ……っ！ なに、これ……っ」

奥深くまで届くナノ振動が、ミカの神経系を直接蹂躪する。

「あああっ！ あたまが……壊れるう……っ！」

（ユキ……お父さん……お母さん……ケン……っ！）

最後に縋ろうとした家族の笑顔も、少年の不器用な面影も、脳髄を焼く暴力的な電気信号の前にあっけなく白く塗り潰されていく。

規律を、羞恥を、名誉を。

それらすべてを物理的な快樂パルスが暴力的に飲み込んでいく。

「いやあっ！ ひい……っ、あ……ああっ♥」

強制的な絶頂が何度も、何度もミカを襲う。

汗が額から溢れ、瞳は焦点の合わぬまま白濁していった。

『血中エンドルフィン、規定値を超過』

システムの無機質な警告音が鳴る中、口の端からは透明な唾液がこぼれ落ちる。

かつて第一ボタンを正していた理性の欠片すらも、白濁した思考の中に溶けていく。

「んんっ……奉仕は……名誉……。私は……っ♥」

ミカの唇から、教育された言葉が快楽に震えながら漏れ出す。

だが、拒絶していたはずの肉体が、狂ったようにチューブを締め上げ、より深い蹂躪を求めて痙攣した。

「国を回す……部品……っ♥」

それはもはや意志ではなく、システムへの完全な屈服だった。

「出力安定。ユニット、適合しました」

神職が静かに鈴を振った。

「名誉ある死は、永遠の桜となる」

ミカの肉体は完全にシステムへと繋ぎ止められた。

虚ろに天井を見つめ、あどけない表情のまま涎を垂らす彼女は、もはや人間ではない。

ネオ・ヤマトを護るカミカゼの、ただの生きた心臓（部品）へと成り果てたのだ。

3. 散華の空

出撃を待つカミカゼの格納庫は、鉄と油の匂いに満ちていた。

18歳の「巫女」サキは、すでに機体サクラ01の狭いコックピットに座し、出撃の時を待っていた。

彼女の白と赤の装束には美しい桜の刺繍が施され、肌の露出を慎ましく覆っている。

だが、その奥ゆかしい布地の下で、彼女の秘所には機体制御の中枢であるメイン操縦桿の基部——冷徹な白磁のオルガデバイスが深々と挿入され、機体と彼女の神経を物理的に直結させていた。

サキは眼前のホログラムディスプレイで、機体後方に接続されたユニット槽を確認した。

強化ガラスの円筒形カプセルが背部中央に埋まり、桜の花びらを思わせる薄紅色の薬液が揺れている。

そこに浮かんでいるのは、白装束の少女だった。

ディスプレイに一瞬だけ、彼女の名前が映し出される。

『ミカ』

すでに初期化を終えた彼女の瞳は虚ろだが、まだ微かな理性の残滓が絶望として張り付いていた。

骨盤は二本の極太の鋼棒によって膣と肛門から深々と貫かれ、内側から完全にロックされている。

半開きの口からはだらしなく涎が糸を引いて流れ出ていた。

サキの指が震え、首元の桜のペンダントを強く握り締める。

「名誉は奉仕にあり。ユニットは道具。目を背けろ……」

冷たい武士道の教えを呟き、サキは自らの心に蓋をしてコックピットを封鎖した。

「ハーモニー・コア、起動」

技師の無機質な声と共に、ミカの血管を灼熱の薬液が駆け巡る。

強制的な精神同調（サイコ・ミュー）のリンクが繋がり、ミカの甘く濁った悲鳴がサキの脳髓へ直接流れ込んできた。

『あ、あぁっ……くるぅ……っ♥』

「くっ……同調率、安定……ッ」

サキの股間のデバイスが、ミカのパルスに呼応してドクンと熱く脈打った。

奥歯を噛み締め、下腹部から込み上げる甘い痺れを強靱な精神力でねじ伏せる。

◇

日本海側の最前線基地から、カミカゼ部隊が轟音を上げて発進した。

サキが駆るサクラ01が先頭を切り、血と油に塗れた陸地を疾走して爆炎の空を裂く。

本土である新京都を守るための、絶対に退くことの許されない防衛線。

上空ではツバメドローンが群れをなし、海面の戦術データをサキの網膜へと直接投影していた。

「エコーズ、接近。距離9000メートル」

警告音が鳴り響き、サキは両脇の補助レバーを握り直す。

「全機、戦闘態勢！」

ミカの意識は、激痛と抗いがたい快樂の波の中で翻弄されていた。

強化ガラスの槽内で、機体が加速するたびに彼女の身体を貫く二本のチューブが荒々しく前後する。

ツバメドローンの視覚情報とサキの脳波がリンクし、眼前の海面から突き出たエコーズの黒紫の触手を捕捉した。

「右翼、触手接近！」

サクラ02から悲鳴じみた通信が入る。

サキは両脇の補助レバーを引き絞り、同時に自らの腰を深く沈み込ませるように捻り込んだ。

秘所の最奥を貫く白磁の操縦桿が、柔らかな粘膜の壁を直接擦り上げる。

腰の動きと締め付ける膣圧の変化が、瞬時に機体の姿勢制御データへと変換されていく。

強烈な重力加速度が機体を軋ませ、内壁を抉る物理的な摩擦がサキの肉体を容赦なく責め立てた。

「んっ……あ……ッ」

サキの装束の下で生々しい愛液が白磁を濡らし、堪えきれない熱い吐息が漏れる。

サクラ01が、ハーモニー・コアの出力で物理法則の壁をねじ曲げたような急上昇と急旋回を放った。

だがそれは、ユニット槽に囚われたミカにとって、この世の地獄を意味していた。

機体が機動するたび、骨盤をロックする冷徹な鋼がミカの柔らかな内臓を容赦なく抉り、搔き回す。

超音速のドッグファイトが、そのまま暴力的なピストン運動となって彼女の最奥を蹂躪した。

『あ、がっ……あああああっ！』

痛みを瞬時に凌駕する異常な快樂パルスが抽出され、ミカの身体は拘束具の中で狂ったように跳ね上がる。

まだ残っていた人間としての羞恥心と恐怖が、抗いがたい絶頂へと強制変換されていく。

『いやあっ、奥、こわれるうっ！ ♥』

強制的な絶頂の連続。

絶え間なく溢れ出す大量の愛液が、槽内の薄紅の薬液を無惨なほどに白く濁らせていく。

「レーザーブレード、起動！」

ミカから搾り取られた莫大なエネルギーが機体を満たし、サクラ01が急降下した。

迫る触手を一刀両断する。

青白い体液が噴出し、海面を汚した。

しかし、その強烈な斬撃の反動すらも、ミカの肉体を挟るエネルギーへと変換されていた。

『ひいっ……！ あ、あぁっ、んんっ……だめ、もう、だめえっ♥』

ミカが極限の苦痛と絶頂の中で生み出す莫大なエネルギー。

それはハーモニー・コアを通じて、サキの脳と肉体にも甘く暴力的な快感として容赦なく逆流してくる。

「くっ……あ、んっ……」

サキは必死に唇を噛み、漏れそうになる甘い吐息を殺した。

他者の命を削り、理性を溶かして得たエネルギーが、機体を通じて自分の下腹部を熱く疼かせている。

少女を燃料にして快楽を得る。

その背徳的な自己嫌悪が、サキの心を激しく苛んだ。

だが、エコーズの第二波が容赦なく海面を裂く。

「ユニット負荷、限界——っ！」

サクラ02の絶叫が通信に響き、直後に途切れた。

極太の触手がサクラ02の背部を貫き、ユニット槽の強化ガラスを粉碎する。

爆炎が機体を包み込み、中の少女ごと海へと墜落していった。

『サクラ02、信号喪失』

サキの目が激しく揺れる。

それでも、戦わなければ全滅する。

「出力.....最大っ！」

サキがスロットルを押し込んだ瞬間、ミカの槽内で搾取の振動が限界を超えた。

致死量の薬液が注入され、ミカの命が極限まで燃やされる。

『あ、ああああああああああっ！ ♡』

もはや意味のある言葉すら紡げない、肺の底からの絶叫。

白濁した薬液の中で、ミカの瞳が目一杯、見開かれる。

その瞬間、完全に壊れる直前の彼女の脳裏に、記憶が閃いた。



『お姉ちゃん、巫女になるよね?』

『ミカ、巫女になれよ……』

最後の理性の瞬きすらも、致死量の快楽に押し流されていく。

完全に崩壊したミカの自我と引き換えに、莫大な生体パルスがサクラ01の反応炉へと雪崩れ込んだ。

サキの網膜ディスプレイに、限界数値を突破したエネルギー充填率が赤く明滅する。

「主兵装、粒子砲……臨界！」

股間を貫く白磁のデバイスから、少女の命を燃やし尽くした熱が容赦なく逆流してくる。

サキは罪悪感と快楽に歪む視界の中で、操縦桿のトリガーを深く引き絞った。

砲門から放たれた、青白い閃光の奔流。

ミカの命そのものを変換した限界出力の粒子砲が、エコーズの黒紫の胴体を真っ向から貫き、海面を蒸発させて巨大な水柱を上げた。

「核に命中！ 第三波接近！」

サクラ03の悲鳴じみた報告。

直後、沸騰する海面から無数の黒紫が這い上がった。

獲物の死角から襲い来る、新たな触手の群れ。

回避軌道への移行。

遅い。

圧倒的な質量を持った暴力が、サクラ01の白き機体を全方位から乱打した。

「がっ……！」

コックピットを揺るがす強烈な衝撃に、複合装甲が悲鳴を上げる。

サキはレーザーブレードを展開し、死に物狂いで迫り来る触手を切り払う。

だが、斬っても斬っても湧き出す黒紫の壁が、機体を上空から押し潰そうと迫ってきた。

アラートで赤く染まるメインモニターには亀裂が走っている。

絶え間ない打撃と質量に押し込められる物理的な圧力が、神経を直結したサキの股間のデバイスへ、骨を砕くような痛覚として直接フィードバックされた。

『—— ♪』

直後、エコーズの不気味な歌声がツバメドローンの防壁を突き破り、精神同調回線を伝って直接サキの脳髄へ侵入してきた。

『警告。精神汚染（メンタル・ハザード）レベル上昇。機体損壊率限界。ユニット分離（パージ）を推奨』

冷酷な赤い警告が明滅する。

「まだだ……ッ！ 動け、サクラ！」

サキは血を吐くような声で叫び、メイン操縦桿に体重を乗せた。

ここでユニットを切り離せば、機体の限界負荷は解除される。

だが、それはミカをこの冷たい海へ見殺しにすることを意味していた。

泥のような罪悪感がサキの胸を締め付け、彼女は必死に機体を引き上げようと足掻く。

だが、幾重にも重なる触手の質量攻撃は容赦なく機体の高度を削り、海面へと叩き落とそうとする。

『ピーッ！ 同調神経へのダメージが致死領域に到達。防衛線崩壊の危機』

システムが無機質に全滅の未来を告げる。

同時に、股間のデバイスを通じて、ミカの思考を完全に支配しつつある狂った歌声が、サキの脊髄へと直接這い上がってきた。

自身の理性がドロドロに溶かされ、思考が白く染まりかける絶対的な恐怖。

（このままでは、二人とも……いや、国の防衛線が突破される……！）

武士道という名の冷酷なシステムの大義が、ミカを救いたいと悲鳴を上げる少女の感情を力づくでねじ伏せた。

サキの指が激しく震える。

首元の桜のペンダントを強く握り締め、絶望と共に瞳を閉じた。

「ミカ……ごめん……っ！」

サキは泣き叫ぶように分離スイッチを叩き込んだ。

背部の装甲がスライドし、爆発ボルトが炸裂する。

完全に白濁したユニット槽が、機体から後方へと冷酷に射出された。

すると、極限まで高ぶった生体エネルギーの濃密な残滓に惹かれたのか。

獲物を求めていた触手の群れが、射出された槽へと一斉に矛先を変えて殺到した。

サクラ01は、その意図せぬ犠牲によって生まれた一瞬の隙を突いて空へと逃れた。

ユニット槽は暗い海底へと沈み、やがて鈍い圧壊音が響く。

砕け散るガラス。

群がる触手。

国の部品として搾り取られたミカの命は、永遠の闇の中へと溶けていった。

サクラ01が予備バッテリーで最後の粒子砲を放ち、エコーズの核を完全に撃ち抜く。

爆炎が海を焼き尽くし、狂った歌声が途切れた。

「第三波、撃退！」

ツバメドローンが残骸を記録していく。

ミカのエネルギーが途切れた瞬間、サキの胸元でペンダントが微かに震えた。

下腹部に残る甘い痺れが、意図せず戦友を囫にして生き延びた己の罪の深さを突きつけている。

「また.....私が、殺した.....」

頬を伝う涙を、武士道が強引に押し潰す。

名誉のために、進め。

◇

カミカゼ部隊は凱旋し、サキは歓声の中で桜の花束を掲げた。

その背後では早くも、血と白濁液に塗れたサクラ01の接続口が、無表情な整備兵たちによって高圧洗浄機で洗い流されていた。

『——次期志願者、搬入準備完了』

歓声の裏で響く無機質なシステム音声。

ミカという少女がいた痕跡は、鉄と油の匂いの中に、ただ無残に洗い流されていった。

4. 祈りの残華

ミカの死から、数ヶ月が過ぎた。

新京都の地下都市は、変わらず鉄とコンクリートの底冷えに包まれている。

カミカゼ整備工場。

夜のチャイムが響く中、ケンはや作業台から顔を上げた。

油で黒ずんだ荒々しい手を、蛍光灯の白い光が照らし出す。

首筋の家紋チップが小さく鳴り、ここは決して自由な場所ではないのだと彼に悟らせていた。

整備士見習いであるケンは、作業場の隅に積まれた廃棄物の山を見つめていた。

ひび割れた強化ガラスのカプセル。

オルガユニット槽の残骸だった。

表面には桜の紋章が薄く浮かび、内側からは焦げた薬液と、生臭い血、そして微かな雌の匂いが混ざり合った不快な悪臭が漂っている。

ケンの胸が、ギリリと締め付けられた。

『うん、頑張る……』

試験会場で、不安げに微笑んだミカ。

『やっぱ無理だったか。巫女は別格だな』

不合格の掲示板の前で、泣きそうな彼女にどう声をかけていいか分からず、強がって冷たい言葉を吐き捨てて逃げた自分。

なぜ、あの時「頑張ったな」と笑ってやれなかったのか。

どうして、くだらない男のプライドなんかで、彼女の心の悲鳴から目を逸らしてしまったのか。

夜毎、悪夢を見る。

暗い海の底で、白装束のミカが極太の管に貫かれ、白目を剥いて快楽に泣き叫びながら沈んでいく夢だ。

ケンは無言で拳を握り、作業台を強く叩いた。

「ケン、ボサッとするな！ エンジンの点検終わったか？」

疲れた声が響く。

目の下に深い隈を刻んだ先輩整備士、タケシだった。

「.....終わってます」

タケシはユニット槽の残骸を一瞥し、鼻で笑った。

「またユニットが死んだってさ。消耗品だ、気にするな」

消耗品。

その冷酷な言葉が、ケンの心に暗い怒りと絶望の炎を灯した。

◇

翌朝、ケンは一層ブロックにあるミカの新しい家へ向かった。

国からの「特例の補償金」によって与えられた、広い配給住宅。

玄関の扉を開けた瞬間、ケンは息を呑んだ。

部屋中に満ちているのは、かつての擦り切れたカビの臭いではない。

青々とした真新しい畳の匂いだ。

「ミカは.....立派に、国に奉仕してくれているわ」

出迎えたミカの母は、監視員事務の真新しい制服を着ていた。

だが、ケンの顔をまともに見ようとせず、虚ろな声でそう繰り返すだけだ。

奥の部屋では、最新の医療器具に繋がれたユキが、見違えるように血色の良い顔で眠っている。

ケンは、部屋の奥に設えられた神棚を見て、胃の腑がぞくりと冷え、吐き気が込み上げてくるのを感じた。

現人巫女の御真影の隣に、本来なら死者を弔う遺影があるべき場所に、写真はなかった。

代わりに飾られていたのは、一枚の薄っぺらい紙の束だけだった。

『特例志願書（写し）』

ミカの震える筆跡で署名されたそのコピーだけが、まるで名誉の勲章のように飾られている。

（なんだよ……これ……っ）

遺影すらない。

無理もない。

正規の「巫女」なら国家が神聖な散華として葬うだろう。

だが、名もなきユニット（部品）に、死を悼む名誉など与えられるはずがない。

公式には、ミカは死んでいない。

今もどこかの機体の奥深くで、チューブに繋がれ、国のために「名誉ある奉仕」を続けていることになっているのだ。

だから母親は、その国家の欺瞞を盾にして、ミカを売った自分自身の罪悪感から目を逸らし続けている。

「ケンお兄ちゃん……？ ミカ姉ちゃん、いつ帰ってくるの？」

目を覚ましたユキの無邪気な声が、静寂を切り裂いた。

母はビクッと肩を震わせ、さらに深く俯く。

狂っている。

この国も、この家族も。

そして何より、たった一言の心ない言葉で、ミカをあんな地獄へ突き落とした自分自身が。

「ごめん……っ」

ケンは吐き気を堪えきれず、口元を押さえてその家から逃げ出した。

真新しい畳の匂いが、ミカの血の匂いのように肺の奥にこびりついて離れなかった。



工場に戻ったケンハ、薄暗い作業台の前に力なくへたり込んだ。

あの家で嗅いだ新品の畳の匂いが、どうしても鼻の奥にこびりついて離れない。

ひんやりとしたコンクリートの床から這い上がる底冷えが、ケンの体温を容赦なく奪っていく。

耳をつんざくような金属の研磨音。

焦げた機械油と、かすかなオゾン臭。

それが今のケンには、ひどく心地よかった。

あの欺瞞に満ちた「立派な家」の空気よりも、油に塗れたこのどん底のほうが、はるかに息がしやすい。

だが、視線を上げれば、そこにはまた残酷な現実が転がっている。

解体待ちの機体から剥がされた、ひび割れたオルガユニット槽。

内壁にこびりついた桜色の薬液の染みが、名もなき少女たちの最期を雄弁に物語っていた。

嘔吐感を噛み殺し、ケンには震える手で作業台の陰から一枚の電子ペーパーを広げた。

通信モジュールを物理的に潰し、縁に油汚れが染み付いた安物のオフライン端末だ。

画面に表示されているのは、オルガシステムの薬液インジェクターに対する、物理的な偽装工作の図面だった。

システムプログラムには一切触れず、快楽中枢を焼き切る劇薬の注入バルブに極小のワッシャーを噛ませ、物理的にストロークを制限する。

AIには「致死量（100%）を注入した」と誤認させながら、実際には流量を絞り、自我の完全な溶解を遅らせるのだ。

稼働時間を引き延ばせば、次に消費される少女たちの犠牲のペースを確実に落とすことができる。

それは、彼女たちが生きたまま凄惨な快楽を味わい続ける時間を延ばすという残酷なジレンマを抱えていたが、それでも命だけは繋ぎ止めようとする、技術者としてのささやかな抵抗だった。

「連合のユニットは裸で槽にぶち込まれるらしい。俺らはまだマシンだろ？」

背後から、タケシが残骸を片付けながら重い声で呟いた。

ケンはずから顔を上げ、振り返りざまに鋭く睨み返した。

「マシ……？ ミカだって、白装束一枚で槽に詰め込まれて……心までドロドロに溶かされたんだぞ」

「名誉ある奉仕だ。文句言うな」

タケシは顔を背けて肩をすくめた。

だが、レンチを握るその手は微かに震え、金属同士がカチカチと頼りない音を立てている。

ケンは立ち上がり、意を決してタケシの胸元へ電子ペーパーを突き出した。

「これ、ユニットが壊れるのを少しでも遅らせられるかもしれないんです。バルブのストロークを物理的に制限して……」

タケシは目を細めて図面を一瞥し、やがて油に汚れた手で胸のポケットから一枚の写真を取り出した。

そこに写っていたのは、ユキと同じ年頃の、タケシの娘だった。

「.....いい案だ。俺の娘も、いつか適性試験を受ける」

タケシの声は酷く掠れていた。

ひび割れた親指が、写真を優しくなぞる。

「あの子を、あんな風に使い捨ての部品なんかにはさせたくねえ」

「ミカは.....消耗品なんかじゃない」

タケシは無言で頷き、ケンの肩を力強く叩いた。

◇

昼休みのサイレンが鳴り響く中、ケンは上層の監視員室に呼び出されていた。

無機質な白い壁。

空調の低い唸り声だけが響く部屋で、冷たい目をした監視員がデータ端末を弄りながら口を開く。

「お前の家紋チップが、深夜の作業中に異常な心拍数とアドレナリン値を検知した。点検作業のバイタルではない。何を隠している？」

背筋を、氷のような汗が伝い落ちる。

ここで反逆が露見すれば、自分や家族が終わるだけでは済まない。

親しく出入りしているミカの家族にまで疑いの目が向けられれば、彼女が命と引き換えに遺したあの真新しい畳の家すら、ユキたちから一瞬で奪い去られてしまうのだ。

「ただの……エンジン図面を見ていただけです。構造が複雑で、ついで」

監視員は鼻で笑い、ケンの顔を覗き込んだ。

「調和を乱すな。次はないぞ」

解放されたケンが凍りついた顔で工場に戻ると、タケシが油まみれのウエスで手を拭きながら静かに告げた。

「お前の案、捨てねえよ。整備のついでに、物理的に少しずつ組み込んでやる。データにゃ出ねえ」

タケシの瞳の奥に、微かな、しかし確かな反逆の光が宿っていた。

◇

夜。

ケンは寮の狭い部屋で蛍光灯を見上げていた。

手の中には、ミカが試験の前に照れくさそうに渡してくれた、桜の刺繍が入った小さなお守りが握られている。



『ケン、頑張ってるね』

あの日笑った彼女の声が、耳の奥で蘇る。

お守りを固く握りしめ、ケンは暗闇に向かって呟いた。

「ミカ、ごめん」

その声は誰に届くこともなく、地下都市の風に溶けた。

「俺、変えるよ。少しでも。これ以上、誰もただの部品として消費させないために」

頭上の監視カメラの赤い光が、無機質に点滅している。

はるか上空で、カミカゼの轟音が響いた。

海の彼方では、今日もエコーズの歌声が低く唸っている。

それでも、少年はもう目を逸らさなかった。

散った桜の残響は、確かな熱を帯びて、狂った世界に響き始めている。

5. 凍てつく刃

ミカを暗い海底に切り捨ててから、数ヶ月が過ぎた。

沿岸基地の断崖に設けられた、吹き晒しの野外修練場。

荒れ狂う波飛沫が叩きつける中、サキはサクラ01のコックピットに独り座していた。

機体のハッチは完全に開放されている。

あえて空調や防風シールドを切り、凍てつく冬の海風を直接身に受けることで機体と魂を同調させる。

それはネオ・ヤマトの巫女にのみ課せられる、寒稽古にも似た狂信的な精神修練だった。

白と赤の装束を容赦なく濡らす冷気に、サキの肌は粟立ち、唇は紫色に変色していく。

だが、彼女を真に苛んでいるのは、肌を刺す外気の冷たさではなかった。

「……っ、また」

サキは首元の桜のペンダントを握りしめ、吐き気を堪えるように身を折った。

神経を直結するオルガデバイスのポートから、幻肢痛のような鈍い疼きが逆流してくる。

脳髄の奥底にこびりついて離れない、名もなき少女たちの死の記憶。

そして何よりサキを狂わせるのは、他者の命を燃料にして得た、あの暴力的なまでに甘い快感のフラッシュバックだった。

背徳的な記憶が脳髄にこびりつき、凍える海風の中にいながら、己の下腹部を熱く疼かせてしまう。

それが決定的なノイズとなり、機体との同期率を無残に引き下げていた。

『見ないで……』

脳裏に、理性を完全に溶かされ、よだれを垂らして堕ちていったミカの瞳が浮かぶ。

その瞬間、サキの指先が微かに震え、操縦桿が誤作動の警告音を鳴らした。

国家の刃であるはずの自分が、個人の罪悪感と浅ましい肉体の疼きに負けている。

「私に……心など、いない」

サキは震える手でペンダントを外し、コックピットの座席に乱暴に置き去りにした。

彼女はそのまま機体を降り、基地の最深部にある浄化の房へと向かった。



そこは、巫女が自らを国家の部品へと作り変えるための、凄絶な修練の場である。

房の中は、静寂と絶対的な冷気に満ちていた。

中央には、桜の紋章が刻まれた黒鉄の支柱。

サキは巫女服を脱ぎ捨てると、一糸纏わぬ姿でその冷たい柱を背にして立った。

直後、無機質な駆動音と共に支柱から数本の金属アームがせり出し、彼女の手首と足首を容赦なく捕らえてロックした。

両腕を左右に拘束され、膝を曲げたまま両脚を強制的に大きく開かされる、無防備な磔の姿勢。

最も秘められた場所が、これから訪れる蹂躪を受け入れるために完全な虚空へと晒された。

肌を晒すことすら恥とする社会で、あえて全裸でシステムに隷属し、己の肉体を無様な標本のように差し出す。

それは人間としての尊厳の完全な放棄を意味していた。

「心頭滅却.....火もまた涼し.....」

彼女が呟くと、無防備に開かれた股間の真下から、二本の極太な生体接続デバイスと、無数の神経探查針が這い上がってきた。

戦場での接続とは比較にならない、肉体を極限まで酷使し、精神を無へと追い込むための神事。

「あ、がっ.....！」

躊躇いのない力で、二本の冷徹な鋼が彼女の柔らかな秘所と排泄孔を同時に貫き、骨盤を内側から物理的にロックする。

さらに、四肢の主要な神経節へ鋭い電極針が深々と突き立てられた。

内臓を強引に押し退けて侵入する圧倒的な質量と、粘膜を直接削り取られるような激痛に、サキの喉が大きくのけぞる。

『神経回路、強制過負荷……開始』

技師の声が、スピーカー越しに冷たく響いた。

次の瞬間、致死量に近い電気信号と、煮えたぎるような高濃度の伝導液がサキの体内の最奥へと勢いよく噴き出された。

「あ、がっ……ああああああああああっ！ あっ、ああっ！」

全身の神経が焼き切られるような激痛。

だが、電極針が快楽中枢を直接ハッキングし、その痛覚を一瞬にして脳を沸騰させるような暴力的な快感へと強制変換していく。

脊髄を直接掻き回されるような、容赦のない機械のピストン運動。

極太の鋼が最も敏感な粘膜を容赦なく擦り上げ、子宮口を激しく突き上げる。

「あっ、あっ、あぁっ……！ 嫌っ、こんな、の……っ！」

鋼が抜き差しされるたび、サキの秘所から溢れ出した透明な愛液が、白濁した伝導液と混ざり合って太ももを卑猥に汚していく。

ズチュ、ズチュと卑猥な水音が静寂の房に響き渡った。



「く……っ、屈しない……。私は……ネオ・ヤマトの……っ、あ、あんっ、ひいっ……！」

武士道で武装したはずの唇から、堪えきれない雌の喘ぎ声が漏れる。

滝のように汗が流れ、抜けるように白い肌が熱情で真っ赤に充血していた。

拘束された四肢がガクガクと痙攣し、狂ったように疼く子宮が、自ら冷たい鋼の先端を咥え込もうと浅ましく収縮を繰り返す。

「ひいつ、あ、あぁっ！ だめ、こわれるっ……あ、ああああぁっ！
いく、いっちゃうっ！ ♡」

強制的な絶頂の波が、何度も、何度も彼女の肉体を打ち据えた。

常人なら瞬時に発狂し、ミカのように自我が崩壊する濁流。

だが、サキはその肉体的な嵐の中に、異常な適性による冷たい理性の楔を打ち込んだ。

自らの肉体が愛液に塗れ、快楽に喘ぐ無様な姿を、まるで他人の肉体であるかのように俯瞰する。

物理的な激痛を、ただのエラー数値として処理する。

脳髄を焼く暴力的な快楽を、単なる電気信号として意識から完全に切り離す。

数時間に及ぶ凄絶な凌辱の果てに、サキの脳内で何かが音を立てて千切れた。

「.....完成しました」

技師の声が聞こえた時、サキの瞳からは一切の光が消えていた。

そこにあるのは、絶対零度の冷徹な虚無。

白濁液に塗れた下半身を蹂躪し続けるデバイスの凶暴なピストン運動すら、もはや彼女の心を揺らすことはない。



サキは房を出て、自室に戻った。

鏡に映る自分は、かつて涙を流し、肉体の疼きに苦しんでいた少女とは別の生き物に見える。

その手の中には、帰りがけにコックピットから回収してきた桜のペンダントが握られていた。

心を捨てようと座席に置き去りにしたはずなのに、無意識に拾い上げてしまった人間の弱さの残骸。

だが、今の彼女は、その鈍い輝きを冷ややかに見つめるだけだった。

「さらば、私だったもの」

彼女はペンダントを小さな神棚の奥底へと押し込み、重い扉を閉ざした。

鍵をかける音すら、今の彼女には不要だった。

その存在と、ミカという少女の記憶を、意識から完全に抹消したのだ。

サキは静かに瞳を閉じた。

次に目を開けた時、彼女はもはや人間ではなかった。

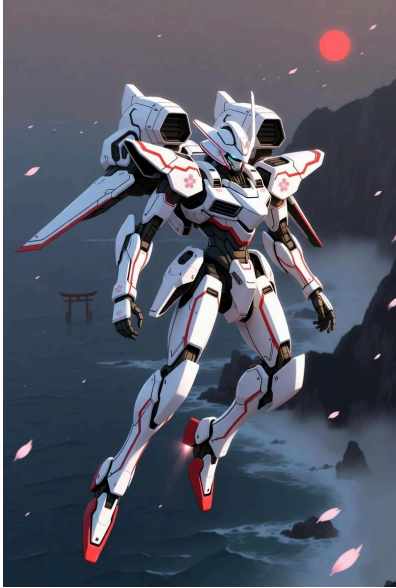
ただ調和を守り、敵を穿つためだけの、冷たい鋼の刃と化していた。

明日もまた、鉄と油の匂いが満ちる格納庫が彼女を待っている。
海の彼方で、エコーズの不気味な歌声が響く。

だが、その不協和音すら、今の彼女には心地よい静寂と等しかった。

-完-

機体設定『カミカゼ』



管轄: ネオ・ヤマト連邦 軍司令部

分類: 主力・量産型 精密機動オルガマシ

1. 機体概要

ネオ・ヤマト連邦の主力機であり、白と赤の流麗な装甲に鎧武者の様式美を取り入れた機体。

肩には国家の象徴である桜の紋章が刻まれている。

連合の圧倒的な物量(ハウンドの群れなど)に対し、搭乗する巫女(パイロット)の高い技量と精神力による高機動・高精度の精密戦闘で対抗する。

「神風」の名を冠し、国を守るための絶対的な刃として最前線に投入される。

2. 主要諸元

全高: 13m

全幅: 6～8m

装甲: ナノポリマー強化中重量装甲(白・赤塗装)

セラフィック・オーダーの機体に通じる美意識と威圧感を両立。

機動性を損なわない中重量の装甲を持ち、物理的な回避とドローンによる情報戦を前提としている。

総合評価スコア: 96/100

3. コックピット・システム:『ハイブリッド・コントロール方式』

「武士道(操縦技術)」と「神道(性エネルギー抽出)」の融合を体現する、ネオ・ヤマト独自の二重操縦インターフェース。

操縦姿勢: セミ・リカンベント(半仰臥位)。

巫女服を模した極薄のパイロットスーツを纏い、シートに深く身を沈める。

メイン操縦桿(オルガデバイス):

巫女の股間に直結する極太のデバイス(標準仕様18cm)。

このデバイスが物理的な固定軸となり、巫女は強烈なGや被弾の衝撃に耐えながら、自らの膣圧と腰のグライド(捻りや突き出し)によって直接機体の姿勢制御や三次元機動を行う。

機体が敵の攻撃を躲すたび、デバイスとの激しい摩擦が巫女の理性を削り取る。

補助グリップ:

両脇のアームレストに備えられたグリップ。

これはあくまでスラスターの微調整や火器管制、ドローンへの指示を行うための「補助」に過ぎない。

4. 特殊機構と脆弱性

■ 二人乗り同期システム『ハーモニー・コア』

前席の正規巫女と、機体後部のユニット槽に收容された「補助ユニット(自我を破壊された少女)」の精神を同期させ、出力を飛躍的に向上させるシステム。

巫女が戦闘で感じる極限の快楽と殺意が、ユニットの少女を強制的に絶頂させ、その生命エネルギーを貪欲に喰らい尽くすことで、単機ではあり得ない限界突破の機動を可能にする。

■ 致命的な脆弱性(『大御神楽』の暴走)

エコーズの歌声(精神汚染波)や戦場の情念(兵士の死の恐怖や欲望)に過剰に共鳴した場合、巫女の自我が快樂の奔流に飲み込まれ、「歩く神(荒御霊)」と化して暴走する危険性がある。この状態に陥ると敵味方の区別なく鏖殺し、最終的にはパイロットの精神崩壊と機体の自壊を招く。

5. 武装およびドローン連携

精密戦闘と情報戦を重視した武装構成。

粒子砲: 射程8kmを誇り、中～重装甲を貫通する主砲。精密な射撃で敵の急所を的確に撃ち抜く。

桜光のレーザーブレード: 腕部から展開される、桜色の光を放つエネルギー刃。エコーズの触手や敵機の装甲を両断する近接格闘の要。

ナノミサイル: 射程10kmの複数目標追尾型ミサイル。広範囲の敵を牽制・殲滅する。

随伴ドローン『ツバメ(八咫鳥)』: 戦場監視や電子戦に特化した小型ドローン群。敵のセンサーを欺瞞するだけでなく、空間の歪みや他陣営の光学迷彩をいち早く検知し、情報戦で絶対的な優位に立つ。また、エコーズの歌声を攪乱・軽減する装置も搭載している。

作品名:オルガエンジン:桜の誓い『散華』

発行日:2026年5月24日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
